

# パンチャーヤト体制下における ネパールの政治と民衆1981-85 (1)

-マダンクリシュナ・シュレシュタとハリワンシュ・アーチャールヤの風刺笑劇をととして-

山本真弓

## 〔1〕はじめに

### 1. ネパール風刺笑劇の伝統と今日

ネパールでは、コメディは民謡とともに代表的な民衆芸能のひとつであり、ネパールのコメディは、笑いの要素に風刺を含むことをその特徴のひとつとしている。したがって、本稿ではコメディを喜劇とは訳さず、風刺笑劇というあまり耳慣れない訳語を使うことにする。また、ネパールはいわゆる多言語・多民族国家であるため、本稿ではその範囲を首都カトマンズ市のあるカトマンズ盆地に限定して議論していることをあらかじめ断っておきたい。

ネパールの風刺笑劇の歴史は古く、一説によると14世紀に確立したマッラ王朝の時代にまで遡ると言われている。それと言うのも、ネパールの風刺笑劇の始まりが、この国で毎年8月に行われるガイ・ジャットラという祭りと深く関係しているからである。

ガイ・ジャットラというのは、その年の死者を弔う祭りであり、同時に議会制民主主義を否定していたパンチャーヤト体制下のネパールでは、国王および王族に対する批判以外は何を発言しても良いとされていた、一年で唯一の日であった。したがって、多くの様々な新聞や雑誌が、その年の政治、経済、社会における出来事を風刺したガイ・ジャットラ特別号を準備し、街角では、にわか作りの檣敷の上で、地域の人々による風刺を効かせた芝居が上演される。また、ロイヤル・ネパール・アカデミーでは、この日のために大ガイ・ジャット

ラ祭が催され、3日から5日にわたる大ガイ・ジャットラ祭のあいだ、アカデミーの舞台上、風刺歌、風刺詩、風刺笑劇などが上演される。さらに、ロビーには風刺漫画が展示され、訪れた人々の目を楽しませるのが恒例となっている。

ガイ・ジャットラの日の風刺は、マッラ王朝のある王妃が息子を亡くした悲しみに明け暮れていたため、それを見かねた王が、誰でも王妃を笑わすことのできた者に褒美を与えるとしたのが、その始まりであると言われている。このようにネパールの風刺笑劇は、ネパールの歴史と文化に深く結びついていると言えるだろう。

ロイヤル・ネパール・アカデミー主催の大ガイ・ジャットラ祭は、1975年より、当時のアカデミーの副会長であったサッティヤ・モーハン・ジョーシによって始められた。ネワール民族であるサッティヤ・モーハン・ジョーシは、1971年よりネワールの若者たちによって運営されていた文化団体「ムナーサー」の活動にヒントを得たと言われている。「ムナーサー」は、ネワール語による表現活動を困難にしたネパール政府の言語政策により、1977年には活動を続けることができなくなったが、普通の人々による自作自演の風刺笑劇の競演を通じて、ここから多くの役者や劇作家が育っていた。

ネパールの「お笑い」が、いつ頃から為政者に対する毒を含んだ風刺を特徴とするようになったかは明らかではないが、少なくとも1950年代末には、政治家を多数登場させた風刺笑劇が、劇作家でも演出家でもない普通の人々の手によって書かれ、上演されていたようである。筆者の研究に協力してくれたマダン・バハドゥル・シュレシュタ氏は、1950年代末から1960年代初めにかけて、ネワールの若者たちによって地域で上演されていたネワール語の風刺笑劇の現存する台本を、資料として提供してくれた。また、バクタプル市に住むネワール作家で、自ら役者も務めたラームシェーカルは、1970年代に自作自演のネワール語風刺笑劇を発表して、ネワールのあいだで活躍していた。本稿で採り上げたコメディアンのみならず、マダンクリシュナ・シュレシュタは、ラームシェーカルと同じネワールであり、ラームシェーカルの政治風刺の手法から多大な影響を受けている。

1980年代初めにデビューし、カトマンズ盆地に住む者でふたりの名前を知らない者はいないとまで言われるほどの人気者になったマダンクリシュナとハリワンシュのコンビは、ラームシェーカルを初めとするネワール語を話す役者たちが政府の言語政策により活動できなくなっていた1980年代から今日に至るまで、国家語であるネパール語で活発に舞台活動を行っている。また、ふたりに少し遅れて人気者になったブラーフマンのサントーシュ・パンタは、筆者がカトマンズに滞在していた1989年当時、『どうぞ怒らないでください』という、社会風刺を効かせた一人芝居をテレビで放映して、評判になっていた。しかし、1980年代半ば以降、ネパールの政治状況は一層厳しさを増し、政府当局によって認められる風刺の幅も以前ほど自由ではなくなっていたなかで、1988年度の大ガイ・ジャットラ祭でのサントーシュ・パンタの大臣風刺がネパール・テレビの検閲にひっかかって、テレビ生中継の突然の中止という事態を招いて以来、サントーシュ・パンタは「私は政治風刺はしない」と公言するに至っていた。そのようななかで、依然としてトップ・アーティストの座にあったマダンクリシュナとハリワンシュだけが政治風刺を続け、また政府当局の検閲にかかることもなかった。これは、民衆の圧倒的多数に支持されているマダンクリシュナとハリワンシュに対して、政府当局が何らかのアクションをとることによって民衆感情が刺激され、体制側にとって不利な事態を引き起こすことを政府が恐れていたためであると考えられていた。後述するように、本稿で採り上げる作品『よいしょ・どっこいしょ』は、まさに体制側がそのような民衆感情を理解するきっかけになった作品であるとも言えよう。

約100年に及ぶラーナー家の支配が終焉し、ネパールがいわゆる近代国家としての道を歩み始めた1950年以降の短い歴史のなかで、政治風刺笑劇が普通の人々によってもっとも自由に繰り広げられていたのは、1960年代から1970年代前半にかけてであると言えるが、それはネワールの人々がネワール語で行っていたという点でひとつの民族集団に限定されており、より多くの人々に向かって語りかけられた政治風刺笑劇は、1980年代のマダンクリシュナとハリワンシュの活動であったと言えるであろう。

## 2. マダンクリシュナとハリワンシュのデビューから現在まで

ロイヤル・ネパール・アカデミー主催の大ガイ・ジャットラ祭で上演される作品は、どれもアカデミーがこの日のために独自に行う検閲に通過したものである。初日には各界の有名人や政治家などの招待客のみに限られる、国王のためのキングズ・ショーが開かれ、以後チケットを買えば誰でも入れるパブリック・ショーが開かれる。現在、他の人々を引き離して圧倒的人気と支持を獲得しているふたり組み、マダンクリシュナ・シュレシュタとハリワンシュ・アーチャールヤは、1981年の大ガイ・ジャット祭でコンビとしてデビューした。ふたりはそれ以前にも、いわゆる芸能人として別々に活動していたが、現在のような形での活動の始まり、および政治風刺を特徴とする作品の作風を確立したのは、このときのアカデミーでのデビュー作『ヤマローク（あの世）』においてである。そして、それ以降、ふたりは互いの名前のイニシャルを合わせた「マハ」として活動し、意見を述べ、作品を発表し続けている。

「マハ」の作品の特徴は、人々のあいだで話題になった問題を題材にした痛烈な政治風刺と、パンチャーヤト体制批判にあったと言える。政党が禁止され、反政府勢力として非合法に活動していたネパール会議派や共産党などの政治活動家たちもまた、教育を受けていないこの国の民衆の多数の理解と信頼を得ていなかったという政治状況において、普通の人々のことばで繰り広げられる「マハ」の、政治家や役人たちを風刺した笑劇は、人々が自ら表現することのできない胸につかえた様々な想いを代弁するものであったと考えられる。それと同時に、それぞれの作品のなかに、必ずさりげない自己主張と示唆を盛り込んだ彼らの作品と活動が、人々に与える影響もまた、他に匹敵するものがなかったであろう。

「マハ」のデビュー作『ヤマローク』は、1979年の反体制運動をテーマに、反体制運動のときの「白いテロ」の仕掛け人と言われている、ときの首相スールヤ・バハドゥル・タパを風刺したものである。スールヤ・バハドゥル・タパをはじめ、ネパール会議派の指導者で反体制運動のリーダーでもあったB.P.

コイララやガネーシュマン・シン、共産党書記長のマン・モーハン・アディカーリーなどを登場させたこの芝居が、キングズ・ショーの日にアカデミーの舞台で、国王夫妻のほか、スールヤ・バハドゥル・タパ、B.P.コイララ、ガネーシュマン・シン、マン・モーハン・アディカーリーその人を観客席に迎えて上演されたうえ、アカデミーが行っているステージ部門のコンペで最優秀賞に選ばれたことは、当時言論の自由がないと言われていたこの国における、風刺芸能の社会的容認度を考えるうえで大変興味深い事実であろう。

マダンクリシュナは1950年、ハリワンシュは1958年に、双方ともカトマンズ近郊の村で生まれ、幼い頃に両親あるいは片親を失い、そのために生活にある程度苦労しなければならなかったという境遇はよく似ている。とはいえ、ふたりとも高等教育を修め、大学入学資格試験に相当するS.L.C. (School Leaving Certificate) に合格しているように、都市のローア・ミドル・クラス出身とみなすことができるであろう。ネワールであるマダンクリシュナは、ブラーフマンであるハリワンシュとコンビを組む以前は、前述した「ムナーサー」で活動していた。創立メンバーのひとりでもあり、「ムナーサー」の副会長を務めていた。この頃のマダンクリシュナはもっぱら母語のネワール語で、風刺やパロディーを歌にして歌っていた。役者というよりは歌手、そして、他人の物真似を得意とする芸人として知られていたようである。「ムナーサー」の活動が政府によって事実上禁止され、ネワールの役者や劇作家たちが表現活動を絶って各々の家業に埋没していったとき、マダンクリシュナはネワール語からネパール語に切り換えることによって、役者として生き延びる道を選んだ。そして、ちょうどこの頃ネパール語を母語とするブラーフマンのハリワンシュに出会う。

1984年ピスカル村で、政府による、村民に対する無差別大虐殺が起こった。ピスカル村でアマチュア芝居の公演中、当時この地域に潜伏しているとの情報のあった「テロリスト」逮捕のため、劇を観ていた村人たちを警官隊が包囲し、女・子供の容赦なく発砲した事件である。政府はこの事件を隠蔽しようとしたが、逃げ延びてきた人々によって語り継がれていった。「マハ」は当時のロケンドラ・バハドゥル・チャンド内閣を風刺した笑劇『よいしょ・どっこいしょ』

で、ピスカル事件について言及したため、公演終了後逮捕され、28時間にわたって監禁された。しかし、政府は、彼らの逮捕に抗議する民衆の勢いに対抗できずにふたりを釈放することを余儀なくされる。

本稿では、1990年4月に崩壊したパンチャーヤト体制下における政治の腐敗、および、ネパールを語るうえで欠くことのできない隣国インドとの関係をベースに、1983年に発足したロケンドラ・バハドゥル・チャンド内閣の無能ぶりと、外国援助に依存しきった政府の経済政策への風刺、そして、前述したピスカル事件を採り上げた秀作『よいしょ・どっこいしょ』の翻訳紹介とその解説を通じて、パンチャーヤト体制下のネパール政府の概観を見てゆきたい。なお、1981年のデビューから1991年発表の最新作『ピクニック』に至るまでの「マハ」の活動全体の流れを理解するために、カセット・テープとして売り出されている「マハ」の全作品を、作品年表として付しておく。〔表1〕これは主に舞台公演を収録したものだが、このほかにも「マハ」は、テレビ・ドラマと映画の制作も手がけており、脚本、演出、制作、主演すべてを一手に引き受けた作品も少なくない。約4時間にわたる長編のお笑い風刺劇『広告』もそのひとつで、この作品は、ネパール国内はもとよりインドのダーズリン地方での度重なる公演と、香港、アメリカ合州国各地、ロンドンでの公演で成功を収めている。さらに、「民主化」以後の1992年現在、国連の要請に基づいて、エイズ撲滅キャンペーン用の作品作りを進めており、完成後は数カ国の言語に翻訳される予定であるという情報も筆者のもとに届いている。ちなみに「マハ」のようなコメディアンのことをネパール語では、「ハンスヤ・ヴィヤンカ・カラーカール」と言い、これは単なる喜劇俳優にとどまらない「笑いと風刺の芸術家」を意味することばである。

### 3. ネパール現代史の流れと1980年代前半〔表2参照〕

ラーナー家支配の末期である1940年代のネパールでは、1846年から続いていたラーナー一族の支配に反対する反ラーナー運動が、インドの反英独立運動と

並行して繰り広げられていた。そして、インドがイギリス支配から独立して3年目の1950年、ときのネパール国王トリブヴァンがカトマンズのインド大使館に保護を求め、その2日後にインドに亡命してインド政府の仲介を得て、ラーナー支配を終わらせた。約100年ぶりに王政が復古したのである。このように、1950年という年はネパール近現代史のなかで非常に大きな意味をもつ。したがって、1979年の体制運動をテーマにした作品『ヤマローク』でデビューした「マハ」の1981年から1991年までの全作品を理解するためには、1950年以降のネパール政治史を振り返る必要があるだろう。ここでは1950年以降のネパール政治史の流れを、とりわけ「マハ」が鋭い体制批判を含む政治風刺の作風を確立した1980年代前半に焦点をあてて述べてみたい。

1950年代のネパールは、政治的に混沌とした時代であった。ラーナー一家支配の下で結成されていたネパール会議派と国王は王政が復古した直後から、政治のあり方についての対立を深め、1952年に約束されていた総選挙は1959年にまで延期された。1959年のネパール史上初の選挙ではネパール会議派が圧勝したが、翌1960年にはマヘンドラ国王が、政党政治はネパールの政治風土にそぐわず、国を分裂させ、混乱に陥れるとして憲法を停止し、議会を解散した。会議派党首B. P. コイララ<sup>(1)</sup>をはじめ、その他の会議派メンバー、他の政党の指導者たちも一斉に逮捕された。民衆が選んだ初めての内閣はわずか1年8カ月で崩壊した。そして、「政党のない民主主義」と呼ばれたパンチャーヤト制度が導入され、これ以降、ゲリラ的な反体制運動やテロ活動が展開され始めることになった。

パンチャーヤト制度とは、一番上に国家パンチャーヤトを据え、その下に県パンチャーヤト、さらにその下に郡パンチャーヤト、という具合にピラミッド的に下部組織をもち、最下部の村落パンチャーヤトのメンバーから順次、上部のパンチャーヤトのメンバーを選出するという、間接選挙によって成り立つ政治体制であった。パンチャーヤト体制の下ではあらゆる政治活動が禁止され、政党の存在は認められていなかった<sup>(2)</sup>。1962年、マヘンドラ国王は新憲法を発表し、政党活動の禁止と国王の権限の強化を定めることによって、国王を頂

点にしたパンチャーヤト体制の法的基盤を確固たるものとした。こうして、政治の実権が国王に集中したパンチャーヤト体制は、議会制民主主義国家の国会に相当する国家パンチャーヤトを有名無実化し、首相を政治の実権をもたない単なる飾りものに変えた<sup>(3)</sup>。そして、憲法ではその地位がらかでない「バーイー・バルダル」と呼ばれた国王の個人的秘書や王族の取り巻きたちによって、実際の政治が決定されるようになっていったのであった<sup>(4)</sup>。このようななかで、1971年に新教育政策が発表され、ネパール語以外の言語が学校教育の場から姿を消してゆくことになる。政府の新しい教育政策と言語政策は、国家語であるネパール語以外の言語を母語として話してきた少数民族の若者たちに、自分たちの民族のことは満足に話せなくなるという重大な影響を及ぼすことになった<sup>(5)</sup>。

1979年、パキスタンにおけるブットー元大統領の処刑に抗議するカトマンズの学生たちが、カトマンズのパキスタン大使館前でデモ行進したことをきっかけに、1960年以来最大の反体制運動が始まった。最初、カトマンズでの学生運動の形を採っていたこの運動は、またたく間に地方に飛び火し、テライ地域の工業都市の労働者たちも参加した大規模な全国的反体制運動へと発展した。

ビレンドラ国王はパンチャーヤト体制に抗議する人々の怒りを抑えきれず、翌1980年、国民投票によって民意を問うことを発表。修正を加えたパンチャーヤト体制か、政党政治の導入かを国民に問う国民投票が実施される。国民投票の結果は、54.8パーセントがパンチャーヤト体制支持、45.2パーセントが政党政治導入に賛成というものであったが、ときの首相スールヤ・バハドゥル・タパが仕掛け人になったと言われている警察官による「白いテロ」<sup>(6)</sup>の最中での国民投票であっただけに、人々の間では、45.2パーセントという数字を、政党政治を唱える反体制側の勝利だとする見方が強かったと言われている。

しかし、いずれにせよ、1980年の国民投票は、スールヤ・バハドゥル・タパの手柄であり、国王側の勝利であった。国王はさっそく、間接選挙によって国家パンチャーヤトのメンバーを選出する従来のパンチャーヤト制度を修正して、国家パンチャーヤトのメンバーを直接選挙で選ぶこととし、翌1981年に、第一



回国家パンチャーヤト選挙を実施する。しかし、このときのパンチャーヤト制度の修正は、新たに設置された「パンチャーヤト政策調査委員会」によって事実上骨抜きにされていた。「パンチャーヤト政策調査委員会」はパンチャーヤト体制の監視役として憲法に定められた<sup>(7)</sup>。そして、その村落レベルでの活動により、住民をくまなくパンチャーヤト体制に組み込むことを目的として機能した。

1980年の国民投票を国王側の勝利に導いたスールヤ・バハドゥル・タパは、第一回国家パンチャーヤト選挙の後、1981年6月に新しい内閣を発足させたが、「バーイー・バルダル」の政府への干渉に耐えられず、「バーイー・バルダル」を「地下のギャングたち」と形容して批判したため、1983年不信任状を突きつけられて退陣した<sup>(8)</sup>。そのあとを「ミスター・クリーン」のあだ名をもつロケンドラ・バハドゥル・チャンドが引き継いだ。

1984年、反体制派の若者たちがピスカル村で芝居を上演中、「テロリスト」逮捕のためという口実で、芝居を観に来ていた村人たちに警官隊が無差別に発砲した。政府によるピスカル村民の大虐殺が行われたのである。さらに、1985年には、反体制派弾圧のために政府当局が仕組んだのではないかとも言われた爆弾事件が、首都カトマンズを初め、全国の都市で連続して発生し、以後、政府の反体制派に対する締めつけは一層強化されていった。1985年の爆弾事件はラームラージャー・プラサド・シンを初めとする4名の「テロリスト」の処刑によって幕を閉じた<sup>(9)</sup>。この後、ネパールの反体制運動は急速に下火になってゆく。

このように、1980年代前半は、1979年の反体制運動の盛り上がりから国民投票での反体制側の敗北と、政府当局による反体制派への徹底的な弾圧に至る過程として特徴づけられるであろう。1985年の爆弾事件以後、1990年にパンチャーヤト体制の下で抑圧されてきた民衆の怒りが吹き出すまで、政府高官の汚職やスキャンダルが次々に表面化したにもかかわらず、組織的な反体制運動がみられなくなる。『よいしょ・どっこいしょ』は、政府がパンチャーヤト体制の立て直しを図り、民衆に対する締めつけを一層強化し始めた1984年に書かれたも

のである。ピスカル事件を真っ向うから採り上げたこの作品で逮捕された「マハ」は、「もう二度とこのような過ちは犯しません」という内容の始末書まで書かされており、そのような意味でも『よいしょ・どっこいしょ』は、厳しさを増していった時代の変化を証言する作品と言えるであろう。

〔注〕

- (1) 1982年死去。
- (2) 1960年12月16日、国王はすべての政治集会、演説、宣伝活動を禁止し、翌61年1月5日、全政党を禁止した。
- (3) 国家パンチャーヤトで国王、王妃その他の王族メンバーの行為について審議してはならないという規定が憲法に存在していた。
- (4) ネパール語で「バーイー」は「弟」、「バルダル」は「宮廷に出入りする人、廷臣」を意味する。かつてのネパールにおける反体制派知識人で、外交官を務めたこともあるリシケシ・シャーハは、「バーイー・バルダル」を「政治エリート」と定義して、一般の政治家や経済界におけるエリート、知識人層とは区別している。「政治エリート」とは「国王にもっとも近く、国王とともに影響力を行使することができる人びと」とであると述べ、具体的に、王妃、王妃の母親、国王の弟と国王の個人的秘書を含む18名の人物の名前を挙げている。(Rishikesh Shaha, "Politics in Nepal:1980-1990", Manohar, Delhi, 1990, pp. 35-42.)。

王妃アイシャワルヤは、故フィリピン元大統領マルコスの妻イメルダと親友関係にあると言われており、国王を上回る絶対的権力者であると、人々の間で囁かれていた。また、1983年にスールヤ・バハドゥル・タパ内閣に対して不信任状を出すように命じたのは、国王の弟ギャネンドラであったと言われていた。なお、国王と王妃はいとこ同士で、王妃の母親は国王の伯母にあたり、幼少の頃実母を亡くした国王の育ての母でもある。さらに彼女は、故マヘンドラ国王が残した遺産の分配を左右する立場にある。

- (5) パンチャーヤト体制が崩壊した結果、1991年11月に公布された新憲法で

は、ネパールが多民族・多言語国家であることが認められた。

- (6) 1979年末から始まった警察による「過激派分子」に対する作戦を言及する際に、ジャーナリズムが用いた用語。このことばは、1980年の国民投票と翌81年の第一回国家パンチャーヤト選挙が終わるまで続いた警察の対「過激派」作戦を示すことばとして定着した。
- (7) 1980年第三次改正憲法に新たに挿入された第41 B条によって規定されていた。
- (8) 1983年7月11日に国王は、国家パンチャーヤトによって提出されたスールヤ・バハドゥル・タパに対する不信任状を受諾した。その翌日7月12日付けの『ネパール・タイム』紙は、スールヤ・バハドゥル・タパ自身のことばを引用しながら、次のような記事を掲載した。「スールヤ・バハドゥル・タパは彼に突きつけられた汚職の疑惑を否定し『汚職は今や社会的病理にまでなっており、どのような集団とどのような個人がこの悪をはびこらせているかは誰もが承知していることである』と述べた。そして彼は、これらの集団と個人を『新しいバルダル』として特定した。」その後のインタビューで、彼はこれらの集団と個人を『地下のキャングたち』と呼んでいる。
- (9) ラームラジャー・プラサド・シン率いる人民戦線（ジャナバディ・モルカ）が、6月22日にデリーで犯行声明を出した。このとき同時に、王政の廃止と民主共和制の樹立、および私有財産制度の廃止を主張している。ネパールの長い歴史の中で、王政の廃止を公然と唱えたのはこのグループが初めてであった。

#### 4. ネパール風刺笑劇の台本とその資料的価値について

本稿で紹介する「マハ」の作品の翻訳作業は、まず翻訳するためのネパール語のテキストそのものを作成するという作業から始める必要があったことを、あらかじめ述べておかななくてはならない。マダンクリシュナとハリワンシュの

過去の舞台公演は、ミュージック・ネパール社からカセット・テープで発売されている。テキスト作成にあたっては、まず「マハ」の市販のカセット・テープを買い求め、それをネパール人の協力者におこしてもらい、活字になった原稿をさらに、作者であるマダンクリシュナとハリワンシュ自身に修正してもらった。このような方法を採用した理由は、第一に「マハ」が自分たちの活動を記録する、あるいは記録されたものを残しておくという習慣を持たなかったことである。わずかに残っている舞台の台本らしきものは、走り書きのメモやセリフの断片であり、また、初演の年月日、公演場所などについての記録は皆無であった。「マハ」の作品年表の中で、初演の年がところどころ抜けているのはそのためである。

第二に、パンチャーヤト体制下のネパールには検閲制度が存在していたため、表現の自由が著しく制限されていたということがある。舞台の台本も検閲の対象となっており、政治風刺を特徴とする「マハ」の芝居の場合はとりわけ、検閲の過程で上演そのものが禁じられる可能性が高かった。そのため、実際の舞台とは異なる検閲用の台本を作成して、検閲をパスするという方法も採られていた。

さらに、舞台芸術を特徴づけるものとしてのアドリブを、「マハ」が頻繁に用いているということも理由として挙げることができるだろう。公演回数を重ね、観客の反応を見ながら、途中で筋書きを変えたり表現方法を変えるようなこともあったようだ。筆者が知るなかでは、たとえば『誓約』という作品は、観客のひとりがビデオに収めた舞台の記録と、市販のカセット・テープで聴く作品とでは、結末そのものが異なっているし、筆者がネパール滞在中に発表された『なぞなぞ合戦』は、カトマンズ公演の際と地方公演の際とでは、アドリブが若干異なっていた。したがって、「マハ」の過去の活動の記録を再現するために、作品のテープおこしと再構成の共同作業を「マハ」自身と共に進めながら、1989年当時の「マハ」の記憶と考えに基づいて作成したものが、ここでテキストに用いた「台本」である。

次に、このようにして再構成された風刺笑劇の台本が、ネパールの政治と民

衆の意識を探るうえで、資料としてどの程度の価値を持ちうるかという点について、若干述べておきたい。

前述したように、パンチャーヤト体制下のネパールでは検閲制度が存在していたため、言論の自由は極めて制限されていた。チャンネルがひとつしかないネパール・テレビとラジオ・ネパール、唯一の日刊ネパール語紙『ゴルカパットラ』、日刊英字紙『ライジング・ネパール』はすべて政府系であり、反政府系と言われていた数多くの週刊新聞は、検閲制度の下で許された範囲内の報道しか認められておらず、いつでも発刊を差し止められる状況に置かれていた。そのような政治状況では、政府の公式発表や新聞、マスコミ報道は、資料として著しく限定された意味しか持ちえない。また、当時非合法に活動が続けていたネパール会議派と共産党も、そのイデオロギー的側面で、民衆の多数の意見を代弁するまでには至っていなかった。さらに、識字率が低いネパールで、ネパール語の現代文学作品や大衆小説、娯楽読み物などは、民衆の多数によって共有されている文化とは言い難い側面を持つ。

一方、視覚と聴覚に訴える芝居はより多くの人々に理解されうる表現形式であると言えよう。さらに、「マハ」の風刺笑劇は、いわゆる純粹芸術的な演劇ではない、庶民的な「お笑い」であるがゆえに、人々がふだん使っている日常的な表現を用いた、誰にでも理解されやすい形を採っている。このことは同時に、外国人の理解を極めて困難にするものでもあり、そのため、「マハ」の活動は多くの外国人がネパールを訪れているにもかかわらず、文学作品や民謡などと異なり、外国人には全くと言ってよいほど知られていない。人々がふだんしゃべっている日常語には、数多くの俗語や慣用的表現が含まれており、また、「マハ」の作品を特徴づける政治風刺は、背景となる事件や人間関係、文化的要因などを理解することなしには意味が分からないからである。しかし、言語的文化的制約ゆえに外国人に理解されにくいものであるだけに一層、これらを通じてその地域とその時代に根づいた民衆の本音を窺い知ることができるのではないだろうか。

すなわち、ネパールという地域性ときわめて狭い時代性に制約されていると

いう特徴をもつ「マハ」の風刺笑劇は、それゆえに「マハ」がそのときどきのネパール民衆に向かって語りかけたものであると同時に、ネパール民衆の「マハ」に対する語りかけでもあると考えられる。なぜなら、舞台は役者と観客、演じる者と観る者との対話によって成り立つものだからである。

マダンクリシュナは、偉大なコメディアンとしてチャーリー・チャップリンの名前を挙げながら、近代文明の中心に位置する西欧・キリスト教世界に生まれ、国際的に広く用いられるに至った英語を母語として話すことを、チャップリンの「幸運」だと語った。ネパール語という政治的弱小言語を媒介に、ネパールという世界の小国の内政を風刺した自分たちの作品の、宿命的とも言える限界を意識してのことだろうが、筆者はむしろ、翻訳を進めながら、その内容に地域的制約を越えた普遍性を見い出した。そこには、現代社会における政治と民衆といったテーマに迫り得る様々な問題が描かれているからである。したがって、「マハ」の作品は、単にネパールの現代政治に関心をもつ少数の者に対してのみならず、一般の読者に対しても多岐にわたるテーマを提供しうる題材となりうると思われる。

なお、「マハ」は笑いの技法として、風刺以外にも語呂合わせやことば遊びなど表現上の技法も豊富に用いており、これらがネパール語研究者の関心を惹くであろうことは容易に想像できるが、本稿では言語学的分析はしていない。また、翻訳に際して、上記したようなネパール語の表現上の「おもしろさ」を必ずしも日本語に置き換えることができなかつたため、本作品を味わううえで「おもしろさ」が半減することは避けることができなかつた。この点に関しては、言語学者の研究と劇作家による翻訳の成果を期待したいと思う。

## 〔 2 〕『よいしょ・どっこいしょ』（1984年作）の翻訳と解説

### 1. あらすじと作品の背景

王室関係の人々を批判したため、1983年不信任状によって退陣させられたスールヤ・バハドゥル・タパの後に首相となったロケンドラ・バハドゥル・チャンドを風刺した作品である。ロケンドラは力がなく、好き放題していた大臣たちを抑えることができなかったと言われている。ネパール製の車を運転する運転手だと名乗るロケンドラの助手たちというのが大臣のことであり、ピスカル村で女・子供を轢き殺したときも、自分ではなく助手たちがハンドルを握っていたのだ、とロケンドラに語らせている。

作品は、ドラム缶に民衆の汗を集めて転がしているロケンドラ（マダンクリシュナ）と、ヒマラヤをテライに運んで来るためにヒマラヤのてっぺんにナイロン・ロープをつけて引っ張っている「男」（ハリワンシュ）との会話で構成されている。タイトルの『よいしょ・どっこいしょ』というのは、ふたりの登場人物がそれぞれドラム缶を転がしたり、ヒマラヤにつけたナイロン・ロープを引っ張ったりするときにかける掛け声である。

ロケンドラは「男」に、どうしてヒマラヤをインドとの国境地帯に広がるテライ地域に持って来ようとしているのかを尋ねる。「男」は、インドから吹きつけてくる熱風でテライ地域のネパール市民は暑さに苦しまなければならない。テライ地域にヒマラヤを置けば熱風を遮ることができるから、テライ地域に住む同胞たちは安らかに暮らせるようになるだろうと言う。インドからの熱風とはインド人移民のことであり、インド人の流入がネパール経済に及ぼしている深刻な影響を風刺したものである。

ネパール経済はそのかなりの部分をインドとの関係に左右されている。それはネパールが歴史的、文化的にインドと密接な関係を持ち続けていることや、インドが南アジア諸国のなかでは圧倒的な力を持つ大国であるのに対して、ネパールが南アジア地域内においても弱小国に属するという力の不均衡などに、

その原因を見出すことができる。そして、より重要な点は、ネパールがインドと中国に挟まれた内陸国であるうえに、中国との国境は地形によって遮られているが、インドとの間は地形上も法的、すなわち条約上も、インド人とネパール人が自由に行き来できるオープン・ボーダーであるということであろう。すなわち、土地に対する人口圧力の高いインド側からネパール側への人口流入とともに、インド人商人によるカトマンズへの経済進出という事態が引き起こされているのである。この場合のインド人商人とは大抵が資本家であり、彼らはネパール国内においてできえネパールの通貨以上に強い力を持つインド・ルピーの力でネパール経済を掌握していったのである。そして、このようなインド人商人の流入に手を貸しているのが、ほかならぬネパールの政治家たちであると言われている。インド人たちはネパールで工場を開いたり、不動産を購入するために、ネパール人の政治家たちからネパール市民権を「買って」「ネパール人として」商売を始めるのである。もちろん、ネパールは独自のネパール市民権法をもっており、外国人によるネパール市民権取得に関しては厳しい条件を付けてはいるものの、市民権の売買に手を貸すネパール人政治家たちの小遣い稼ぎという現実の前で、そのような法律は有名無実化していた。だから、「男」がインドからの熱風を遮るためにヒマラヤをテライ地域に引っ張ってくることに、ロケンドラは反対する。「私の店が商売できなくなってしまうではないか!」というのだ。この時点では「男」は（そして、観客も）ロケンドラが誰なのか分からない。「マハ」は芝居が展開してゆくにつれて徐々に登場人物の素性が明らかになるという構成を採っている。

ロケンドラは自らを「政党撲滅協会」の140分の25ジャッカル・パワーのネパール製の車の運転手だと名乗る。「政党撲滅協会」というのは、ネパールに実在するマラリヤ撲滅協会をもじったものであり、140分の25ジャッカル・パワーというのは、いわゆる100万馬力といった言い方に倣って造られた造語で、140は国家パンチャーヤトのメンバーの数、25は大臣の数である。さらに、馬の代わりにジャッカルという動物を使ったのは、ジャッカルが動物の王様ライオンの家来で、ネパールでは賢いというイメージを持っているからである。



すなわち、「政党撲滅協会」というのはパンチャーヤト体制を指し、140分の25ジャッカル・パワーのネパール製の車というのは、ネパール政府を表しているのである。そして、その車の運転手とは、言うまでもなく、首相である。

ロケンドラがドラム缶に民衆の汗を収集して転がしているのは、ネパール製の車の燃料がガソリンではなく民衆の汗、それも暑いときに流す汗ではなく、重労働したときに額からヒタッヒタッと滴る汗だからであり、ロケンドラはそのような汗を集めるために各役所を訪れて役人たちが民衆から搾りとった汗を集めて回るのである。話がこのように展開してゆくなかで「男」は（そして、観客も）、ロケンドラが誰なのかを理解する。だから、ロケンドラが、自分が運転している車は、前の運転手がすでに壊してしまっていたので前に進むことはできず作動するのはバック・ギアだけだが、クラクションは抜群で今のところ事故を起こしたことはない、と言うと、「先日ピスカル村で人々を轢き殺したのはその車じゃなかったんですか？」と反論する。

ロケンドラが運転しているネパール製の車の燃料が民衆の汗だということを聞いて「男」はロケンドラに、民衆の汗ではなしにヒマラヤの汗やソエンブーの汗で車を走らせたらどうか、と言う。ソエンブーというのはカトマンズにある代表的仏教寺院で、ネパールの観光パンフレットには必ずといってよいほどその写真と紹介が載っている観光の名所でもある。ヒマラヤやソエンブーも汗をかくのか!?!とびっくりするロケンドラに、「男」は観光と外国援助に頼りきったネパール政府の経済政策を見事に風刺してみせる。ネパールの開発予算は、たとえば1956年に始まる第一次計画では100パーセント外国援助に依存しており、1985年からの第七次計画でも70パーセント強を外国援助に頼っているといった状況である。怒ったロケンドラがヒマラヤを引っ張って来ようとしている「男」を阻止するところで幕となる。

農業以外に目立った産業のないネパールでは、輸出による十分な外貨の獲得が望めない。したがって、ネパール経済を支えているものは、農林業製品の輸出のほかにはもっぱら観光客が落とす外貨とゴルカ兵の送金、そして外国からの経済援助である。ゴルカ兵というのはいわゆる傭兵で、インドがイギリスの

植民地であった頃に、イギリスにゴルカ兵を差し出すことによって植民地化を免れたという説もある。現在では、ゴルカ兵はイギリス軍とインド軍のなかにおり、そのなかにはインドのネパール系市民も若干含まれているものの、大半はネパールの地方の少数民族の若者たちによって構成されているようである。フォークランド紛争の際には、ゴルカ兵としてイギリス軍の最前線に行かされ戦死しているネパールの若者をめぐって、政府がネパールの若者の命を売り物にしているという非難の声があがった。インド軍がスリランカに侵攻したときも、ゴルカ兵が送り込まれていたと言う。ゴルカ兵からの送金はネパール経済を支える重要な外貨獲得源のひとつであるが、ゴルカ兵を送り出すことに対する世論は否定的である。本作品の中では、コロombo・プランに引っ掛けてヘランプ・プランという形でゴルカ兵の派遣について触れている。

以下、ピスカル事件、ゴルカ兵をめぐる世論、インド人移民とネパール市民権問題について個別の解説を付け加えておきたい。なお、新聞記事の紹介はすべて、カトマンズのレグミ研究所が発行している『ネパール・プレス・ダイジェスト』からの引用である。

### ① ピスカル事件

1984年1月14日、シンドゥパルチョーク県ピスカル村で起こった警官隊による組織的な発砲事件は、事件当日の経過をめぐる政府発表と非政府系ジャーナリズムが流した情報とが大幅に食い違っていた。事件当日の経過について、政府系日刊ネパール語紙『ゴルカパットラ』は1984年1月17日の記事で次のように述べている。「1984年1月14日シンドゥパルチョーク県のチーフ・オフィサーが、過激派分子が非合法活動を行い、数名が逮捕されたとの報告を受けて、警察官を伴ってピスカル村を訪ねた。しかし、過激派分子に煽動された群衆は彼らを逃がそうとして警官をレンガ片で殴り、武器を奪おうとした。銃の空砲による威嚇が何ら効果を挙げなかったため、警官は群衆に向かって発砲することを余儀なくされた。グスカル村のジェタ・タミとチャルサル村のイレ・タミがその場で死亡、他2名が負傷した。さらに数名の警官がレンガ片により負傷し

た。」

一方、非政府系の様々な新聞が報道した事件に対する非公式情報には次のようなものがある。「1984年1月15日の早朝、120名の警官がピスカル村の3000名にのぼる非武装の村人たちの集まりを攻撃し、数回にわたって発砲した。女・子供を含む4・5名がその場で殺された。副警視総監に率いられた警官隊は、14日の夜10時にバルハビスからピスカルへ向かい、15日午前4時頃に、村を三方から包囲して無差別発砲を開始した。罪状は、この村で過激派ソングが歌われ、過激派演劇が上演されたというものであった。外出禁止令が隣接するスコシ村とその村に通じる道路にも敷かれた。警官の発砲によって負傷したと思われる9・10名が腰を縄で縛られ、森の中を通過して警察の囚人護送車まで連行され、カンマンズへ連れて行かれた。彼らはいかなる治療を受けることも拒否され、面会人に会うことも許可されていない。ピスカル村は隔離されており、警官は数名の死体を河の堤防に埋めたと供述している。人々は恐怖のため、村を離れようとしている。」(『チットラン・ウィークリー』紙、1984年1月18日付)

「シンドゥパルチョーク県ピスカル村で起こった発砲事件はいかなる理由によっても正当化されうるものではない。実際、政府発表は問題を一層複雑にし、混乱を招いた。この県で危険な過激派グループが活動していたという報告はかつて一度もなく、ピスカル村はきわめて遅れた後進地域であり、そこの住民が法を自分のものにして危険な活動を行うなどという問題は起こりようがない。政府発表は過激派分子とその指導者を特定しておらず、過激派分子がいるという告発をしても誰も信じはしないだろう。警察が正当防衛で発砲しなければならなかったという言い訳についても、このような発砲事件のあとには必ず行われるでたらめな議論以外の何ものでもない。」(『ネパーリー』紙、1984年1月18日付)

『ナガ・ネパール』紙(1月20日付)は政府に対して「過激派」分子の名前と彼らの「非合法」活動の性質を明らかにするよう求めた。

このように、ピスカル事件をめぐる政府発表や、警察がとった行動に対する

非難が集中するなかで、政府はさらに、事件後のシンドゥパルチョーク県で大規模な作戦を開始した。『チットラン・ウィークリー』紙（1月24日付）によると、「ピスカル村におけるいわれのない発砲によって数名の死者を出したあと、警察はシンドゥパルチョーク県東部の17の村落で大規模な作戦を開始した。大作戦の名の下に武装した警官たちがこれらの村落を恐怖地帯へと放ったのであった。ピスカル村で発砲のあった次の日、警官はヘカンプルの家々に侵攻し、数名を逮捕した。そのなかには、政府の役人や行商人、女・子供まで含まれていた。これまでに70名を越す人々が逮捕され、さらに、逃亡中の約200名に対して逮捕状が出されている。匿名を希望するある地元の村人によると、500名近い警官が村に配置されていた。警官たちは現地の人々に対して残虐行為を行ったと言われている。ジャーナリストたちが混乱のあった地域の状況を把握するため、現地入りの許可を求めていたが、現地当局は彼らに、許可が下りるまで10日間待つように求めた。」

このような非政府系新聞の報道に対して、『ゴルカパットラ』紙（1月27日付）は次のような記事を掲載した。「内務大臣はシンドゥパルチョーク県ピスカル村における警官隊の発砲について、若干の地方紙が誤った偏見に満ちた報道をしていることを遺憾に思うと共に、死亡したのはわずか2名だけだということを改めて確認した。大臣はまた、過激派分子は長い間にわたって、ピスカル、バルハビス、グスクン、テカンプルの各村落パンチャーヤトで活動を続けており、地元の住民に対する略奪行為やテロ行為を行っている。さらにこの地域の警官や役人たちの暗殺も行っている。」

同じく政府系日刊英字新聞『ライジング・ネパール』紙は1月29日付けの記事で「テロリストはその地域で長いあいだ活動を続けており、1月14日の事件で2名が死亡したときも、警官がそのような分子の群れに対する正当防衛のために発砲することを余儀なくされたからだ」という意見を村人の発言として紹介し、「テロリスト」の氏名の公表や具体的活動の内容など、様々な疑問に答えることなく従来の見解を繰り返した。その後政府は結局ピスカル事件の真相を明らかにしないまま、事件そのものに触れることをタブー化していった。ピ

スカル事件についてはパンチャーヤト体制下における反政府組織の独自の調査に基づく報告書が出版されているが、もちろん町の本屋で入手することはできない。ピスカル村のその後の状況については、様々な制約により調べることができなかった。

## ② ゴルカ兵をめぐる世論

1981年9月17日付けの『ニュー・ライト・ウィークリー』紙はゴルカ兵について次のように述べている。「インド独立後の三者協定の下で、インド政府はもっぱら平和時における任務のみに限定する1万2000人もものゴルカ兵を徴募している。しかし、実際には、インドは現在12万5000人のゴルカ兵を保有しており、そのうちの9万人から10万人はネパール市民である。そして、彼らはしばしば、戦場における任務に従事させられている。ゴルカ兵は中国軍やパキスタン軍と戦闘を交えてきたし、将来バングラデシュやその他の友好国の軍隊を敵にして戦うことがないとも限らない。彼らの勇敢さは広く認められているものである。しかしながら、ゴルカ兵が、インド人上官による彼らのコミュニティーに対する侮辱に反発し、さらに、彼らが自分たちの身分証明書を中国人に売り渡したという言い掛かりに抗議したということ以外にいかなる根拠もなしに、7年から14年にわたる実刑を言い渡されたことは、恥ずべきことである。いったい中国人がこれらゴルカ兵の身分証明書を買う必要があるのだろうか？われわれは、ゴルカ兵がインドの自由と国防のために払った様々な犠牲にもかかわらず、彼らに対して行われる不正義に彼らが声を上げるよう呼び掛けるものである。われわれは、ゴルカ兵に対する不正義についての報告を読んだすべての人々が、このことをまわりの人びとも知らせるよう要望する。さらに、われわれは、すべてのネパール人がインド軍に奉仕するためインドへ行く事を拒否し、ネパールと友好関係にある他の国々を敵にして戦うことを罪だと考えるよう求めたい。われわれは自国に対する義務を忘れて、過去2世紀ものあいだインドのために無目的に血を流してきたことを理解すべきである。」

インド独立後の三者協定とは、1947年にネパールとイギリスとインドとのあ

いだで結ばれた協定を指し、ネパール国内におけるゴルカ兵の徴募はこの協定に基づいて行われている。すなわち、ゴルカ兵はインド軍だけでなく、イギリス軍のなかにも存在するのである。第二次世界大戦後もイギリス軍の一員として、マレーシア、インドネシア、ブルネイ、キプロスなどに派遣されている。

1982年5月のフォークランド紛争の際、ネパール国内では、イギリス軍によるゴルカ兵のアルゼンチン派遣を認めている自国政府に対して、非難の声が湧き起った。

「帝国主義者の戦争にゴルカ兵が用いられるのは悲しむべきことである。多くのネパール人が、第二次世界大戦、印パ戦争、中印戦争で命を失った。今また、フォークランド戦争において、帝国主義者の利益を守るために命を落としつつある。この国でゴルカ兵の徴募センターを通して利益を得ているのは、一部の反動的分子である。われわれの政府はネパール人の若者を公然と売り渡している。徴募センターをすみやかに廃止し、国外のすべてのゴルカ兵を召還すべきである。さもなければ、戦いで殺されたゴルカ兵に対して、政府は責任を負わなければなるまい。」(『チャハラ・ウィークリー』紙、1982年5月31日付)

ネパール急進派学生組合 (Nepal Progressive Students Union) とネパール全国学生連合 (Nepal National Students Union) の委員長は、イギリスがフォークランド戦争でゴルカ兵を使用したことを非難し、ネパール国内のゴルカ兵の徴募センターを廃止することを求める声明を出した。

また、このとき、国家パンチャーヤトの討議で、ゴルカ兵に対する給与、年金その他の支払いと帰国する際の支払いをそれぞれ300パーセント引き上げることが要求され、その理由として「彼らは国内における失業ゆえに外国へ行ったのだから」という答弁が行われている。実際、イギリス軍内のゴルカ兵の給与はイギリス兵のそれを下回っていた。理由は、イギリス軍内のゴルカ兵の給与をインド軍内のゴルカ兵の給与に相当するものと取り決めた、インド・イギリス間の協定があるからだということであった。この点についても、改善を求める議論が新聞などで採り上げられた。

### ③ インド人移民とネパール市民権問題〔漫画参照〕

1950年に王政が復古し、近代国家の道を歩み始めたネパールは、1952年に「ネパール人」の法的資格を定めるため、ネパール最初の市民権法を制定した。しかし、これに基づいて作成された選挙人名簿にインド人が含まれているという非難が投げかけられ、ネパール政治史のなかで初めての国民選挙を前にした1958年、市民権論争が展開された。

ネパールには、インドと国境を接しているテライ地域に多くのインド系住民（インド人移民の子孫）が住んでいるだけでなく、首都カトマンズに出稼ぎに来ているインド人やインド系住民、あるいは店舗を持っているインド人商人などもおり、これらの人々についてインド人であるかネパール人であるかを判断するのが極めて困難な状況にある。さらに、このような状況を利用して「インド人」になったり「ネパール人」になったりするインド人商人やネパール政府留学生としてインドで学ぶインド人学生などもいた。1958年の市民権論争はインド人とテライ地域のインド系住民とを攻撃する形で、主にカトマンズ盆地に住む人々によって政治的意図を背景に行われた。そして、1962年憲法の市民権に関する規定は、外国人がネパール市民権を獲得するのを極めて困難にした。憲法第8条2項によれば、(a)ネパール語を書くことができ、(b)職業に就いてネパールに居住しており、(c)現在の市民権を棄て、(d)「ネパール人に起源をもつ」(Nepalese origin) ばあいは2年以上、そうでない場合は15年以上ネパールに住んでいることが要求された。

ところが、政府によって行われた1980年代初めのテライ地域10地区のサンプル調査では、そのような厳しい条件にもかかわらず、ネパール市民権を獲得しているインド人移民は相当数にのぼると報告されていた。たとえば、5年から9年前に移住してきた者のうち63.1パーセントが市民権を獲得しており、15年の居住要件があるにもかかわらず、市民権獲得に要した平均年数はわずか5.9年であるという。政治家でもあるハルカ・バハドゥル・グルン博士によって行われたこの調査の報告書は、政治家の推薦に基づく市民権獲得手続きの廃止を含むいくつかの勧告を行っており、通称『グルン・レポート』と呼ばれるこの

報告書のためにグルン博士の暗殺の可能性まで人々のあいだで噂されるほどの衝撃をネパール社会に与えたと言われている。1983年8月8日に提出された『グルン・レポート』は、インド人の流入に対して厳しい制限を設けることを全体の趣旨としていたため、ネパール・インド間の緊張を高めることにもなった。

政府によるテライ地域のサンプル調査と並行して、1980年代初め、インド人の流入と市民権問題をめぐる様々な議論が新聞紙上を賑わせた。議論は大別すると、外国人の流入によりネパールの独立と主権が脅かされているとして、オープン・ボーダーの廃止、労働許可証制度の導入、すべてのネパール人に対する身分証明書の発行を主張する意見と、インド人流入に反対する組織的キャンペーンはテライ地域のネパール人を外国人として差別することによって、ネパールの統一を損なおうとしているという意見とに分けられる。とはいえ、カトマンズ盆地では後者の意見は少数派であり、全体の論調は、インド人の流入に対して否定的であった。以下、いくつかの「声」を拾ってみる。

「『外国人』の流入により一部のテライ地域では、『外国人』の数が地元の人々の数を上回っている」

「外国人の流入により、ネパール人は自らの国のなかで難民のような状況に陥っている。このような状況の下での人口政策や家族計画の実施は国家の害になるだけである」

「外国人の数は580万人で、そのうちの9割がネパールと接する隣国人であり、彼らはあらゆる商業活動を支配している」

「ネパールの人口の3分の1がインド人であり、ネパール経済の3分の2が彼らの支配下にある」

「ニューロード（カトマンズの「銀座通り」－筆者注）の75パーセントの店がインド人のものであり、ピラトナガル（ネパール第二の都市－筆者注）のダナワト・ビディ工場の1,600人の従業員はすべてインド人である」

「インド人ビジネスマンは数十億ルピーに相当する富をインドに持ち出し、我々の銀行を空っぽにしている」

「カトマンズで果物や野菜を売る者、建設労働者のほとんどは外国人である。」



彼らがネパール市民である可能性もあるが、宗教的文化的類似ゆえに見分けがつかない。ネパールはこれらインド人労働者を吸収する能力を持っていない。インドのような大国で300万人のネパール人の流入は大海の一滴にすぎないが、全人口1,500万人足らず（1983年当時－筆者注）のネパールに同じだけのインド人が来れば、我々の経済は破綻する」

「ネパール・ナショナル銀行の調査によると、毎日約2万5,000人のインド人がオープン・ボーダーを渡って来ている」

このような声に対して『ネパーリー』紙は次のような反論を掲載した。「7～8年前に市民権証を発行するため、カトマンズ盆地とテライ地域の22の県にチームが派遣された。しかし、彼らの仕事は欠陥だらけで、何十万人ものテライ地域の人々が市民権証を得られなかった。土地を購入したり職に就いたりするのに市民権証が不可欠であることを考えれば、このことが人々にもたらした困難は想像に難くない。（中略）この地域からこれらのチームが去った後に出生した子供たちの運命はどうなるのだろうか？出生そのものが登録されないし、人々は登録する知識を持っていないのである。」（1982年2月15日付）

労働許可証制度の導入はインド政府の激しい反発に合い、多くのインド人を抱え込んでいるネパールの状況は変化していない。

#### 参考文献

Frederick H. Gaige, Regionalism and National Unity in Nepal,  
University of California Press, 1975.

Task Force on Migration, National Commission on Population,  
International Migration in Nepal-Summary & Recommendation,  
August 1983.

## 2. 全訳および訳注

登場人物 男 (ハリワンシュ・アーチャールヤ)  
ロケンドラ・バハドゥル・チャンド  
(マダンクリシュナ・シュレシュタ)

-ひとりの男が、よいしょ、どっこいしょと言いながら、太い縄を力いっぱい引っ張って舞台中央へ出てくる。

男) よいしょ、どっこいしょ、よいしょ、どっこいしょ……。力いっぱいやれよ。よいしょっ。ほらっ、来たぞ、来たぞ。その縄を持ってこい。このてっぺんにくくりつけるんだ！ちがう、こっちだ！脳味噌がないのか？そうだ、こっちのてっぺんだ。ひっぱれ。いいかっ。それっ、ひっぱれ！よいしょってかけ声をかけるからな。よいしょ、どっこいしょ……。

-舞台の袖からロケンドラ・バハドゥル・チャンドが、よいしょ、どっこいしょ……と言いつつ、大きなドラム缶を転がしながらやって来る。

ロ) [節を付けて歌うように] 一生懸命やれよ、やっていますよ。

言うとおりにしろよ、していますよ。

蹴っ飛ばせよ、蹴っ飛ばしていますよ。

捕らえて引っ張れよ、引っ張っていますよ。

えんやら、どっこいしょ。それえええ。

男) [道を遮って] やめっ！チッチッチ……。ここからどこへ行こうとしているんですかね、あんた。

ロ) どこへ行くかって？こっからヴィシヤルバザール<sup>(1)</sup>に行くときさ。

男) こっから、あんた、ヴィシヤルバザールに行くときだって？こっからあと10分も歩けばヴィシヤルバザールじゃなしに、ナムチェバザール<sup>(2)</sup>に着き

ますよ（笑）

ロ) えっ！ナムチェバザールに着くって？どうりで寒くって、すね毛が立っているわけだ！（笑）それにしても、いったいぜんたい今朝からどうなってんだか・・・道がこんがらがっているよ、まったく。今朝早くバグマティ河で沐浴しようかなあと思って行ってみたら、よその家の嫁さんが水浴びしているトイレに着いちまったし、（笑）国家パンチャーヤトの椅子に座ろうと思ったら、ナガル・パンチャーヤトのトラクター<sup>(3)</sup>の中に座っていたし、（笑）そして、今度は、ヴィシャルバザールに行くつもりがナムチェバザールに着いたってよ！一体どうしたってんだ、今日は？地面がどうにかなっちゃったのかね？それにしちゃあ、今朝、土地改革の地籍調査官に会ったけれども、そんなことは一言も言ってなかったぞ。

男) ねえ、何を転がして持ってきているんですか？よその店で売り物にしている灯油を盗ってきたんですかね？（笑）お顔を拝見したところ、どうやらそんな感じですね。（笑）

ロ) こらっ、何てことを言うんだ！私がそんなドラム缶を転がして持ってくるような男かね？私はね、君、そうしようと思ったら、灯油缶だけじゃなしに、灯油を売っている店の嫁さんだって連れてきてやるぞ。（笑）

男) よその家の嫁さんを連れて来れるって？連れて来れるからって、ガネーシュ寺院の近くの嫁さんだけは連れて来ないようにして下さいよ。言っときますけど、僕。

ロ) どうしてだね？

男) 彼女と今、恋愛中なもので・・・。3週間目になるんですよ。（笑）

ロ) 3週間目だってよ。この私とは満席で4週間目が上演されてんだぜ。<sup>(4)</sup>

男) 〔泣きながら〕ウウウ・・・誰とだって？

ロ) あれだよ。あの色白の、太ッチョの・・・。

男) えーっ。それは僕が言ってる女の子の義姉さんですよ。（笑）僕が言ってる娘は、色が黒くって、痩せっぽちなんだ。

ロ) 〔男が引っ張っているナイロン・ロープを見ながら〕で、縄を付けて、そ

の色の黒い瘦せっぽちのを引っ張って連れて来ようっての？

男) その色の黒い瘦せっぽちの娘まで、ナイロン・ロープで引っ張るのか？その娘なら、僕の愛の縄で引っ張って来れるさ。(笑)

ロ) だとすると、あんた、そんなふうに縄をかけて、何を引っ張ってるんだね？

男) 今は言えないよ。あとで言うよ。そのうち自然に分かるさ。

ロ) 言えないだって？あとで・・・〔少し考える〕そうか！パンチャ大会に出席させるために、村々から人々を引っ張って来ているんだ！（拍手・歓声）

男) パンチャ大会に出席させるのに、こうやって縄を付けて引っ張る必要があるか？12ルピーだぞって言えば、走って飛んで来るじゃないか。(笑)<sup>(6)</sup>

ロ) だとすると、何を引っ張っているんだ？くそっ、何で分からないんだ！ナショナル銀行に嫉妬させるために外国の銀行を引っ張ってきているのか？そうだろう？きっと、そうだ！（笑）<sup>(6)</sup>

男) 僕はナショナル銀行の亭主か？嫉妬させて引っ張って来るんだって？

ロ) だとすると、何を引っ張ってんだ？最初の文字を言えよ。何から始まる？当ててみよう。

男) 「ヒ」から始まる。僕はあんたにチャンスを与えたんだからね。

ロ) 「ヒ」から始まるって？

男) そうだ。

ロ) ええと……。ズバリ当ててやろうか。

男) どうぞ。

ロ) 「ヒ」から始まるって言うのだなあ。昨日（ヒジョー）不信任状を突きつけられて辞めてった奴を今日もういっぺん引っ張ってるんだ！（拍手・歓声）

男) 昨日、不信任状を突きつけられて辞めてった男を呼び寄せるのに、今日もういっぺん縄を付けて引っ張る必要があるか？チュツチュツ、こっちにおいでって言えば、飛んで来るよ。(笑) 今頃、いつ呼びに来るか、いつカムバックしようかって、機を狙って待ち構えているさ。

ロ) だとすると、何を引っ張ってるんだ？

男) ヒマラヤを引っ張ってんだよ。見えないかい？あの縄を見てごらんよ。ダ

ウラギリ<sup>(7)</sup>にくくり付けてあるだろ。

ロ)〔舞台の奥を見ながら〕ほう、なるほど。ほんとうだ、ヒマラヤを引っ張っているぞ。で、ヒマラヤなんか引っ張って、何をしようって言うんだね? レモン・ソーダでも飲むつもりか? (笑) それとも、さあ、いらっしゃい、冷たい氷だよって売るつもりか? (笑)

男) 僕らのテライ地方に住んでいる同胞たちは、もの凄く暑いんだそうだ。外から熱風が吹き込んできて、とにかく、耐え忍んでいるんだってさ。それで、ヒマラヤをそこへ持って来てまわりに置いたら、涼しくなって、やすらかに過ごせるだろ? (拍手)

ロ) やすらかに過ごすためにヒマラヤを引っ張ってそんなとこへ持って行かなくちゃならんのか? 先日、私はテライに行って2カ月の間やすらかに過ごしてきたぞ。

男) やすらかに過ごしただって?

ロ) そうだ。

男) どうやって?

ロ) 私と一緒にいった友人の名前が『やすらか』だったんだ。(笑・歓声)<sup>(8)</sup> ハッハッハッ……。だから私は、2カ月間やすらかに過ごしてきたよ。したがってだな、いいか、ネパールでは、皆が自分の家族のひとりに『やすらか』って名前を付けるとだな、誰もがやすらかに暮らせるってわけだ。(笑) だから、ヒマラヤを引っ張って、そんなとこに持って行く必要なんてないさ。

男) そんな名前だけで何とかなるもんなら、皆、僕の足元にひざまづいて頭を下げなくちゃならないじゃないか!

ロ) どうして?

男) 僕の名前は『神様』だ!<sup>(9)</sup> 神様にかしづかなくていいって言うのか? (笑)

ロ) 名前は神でも、行いはデタラメ。そんなことで一体誰がかしづくって? かしづくどころか、頭を蹴飛ばされるのがオチだぞ。それに、北のヒマラヤを全部引っ張って南に置いたら、北は何もなくなって筒抜けになってしまうじゃ

ないか？（笑）

男）誰がヒマラヤを全部持って来るなんて言った？北が筒抜けにならないように、内側のヒマラヤは北に置いておくよ。こっちかわに出ている外側のヒマラヤをだね、南へ持って来て、そこに置くんだよ。この国はどうせ陸に囲まれているんだ。だったら、熱風に囲まれるよりは、氷に囲まれる方がまだマシだ。（拍手・歓声）<sup>(10)</sup>

ロ）おもしろい！おもしろいぞ！！こりゃあ愉快だ！ところで、ヒマラヤを引っ張って来てそこに置いたとしても、それでもなお、愉快かね？

男）ああ。愉快じゃないか。

ロ）おまえの目ん玉を抜き取って足にくっつけたとして、それでも愉快か？（笑）

男）愉快じゃないですか！なんて素敵なんだ！道を歩いているときに、つまづいたりしないだろ？（笑）つまづかなければ、窓から女の子を覗き見るのに専念できるじゃないですか！（笑）

ロ）ふむ。おまえの目ん玉を抜き取って足にくっつけたら、つまづかない。それじゃ、就任演説をして歩く政治家の口をとってポケットに入れたらどうなる？（笑）

男）耳のお医者家で、御飯が炊けなくなるよ。

ロ）就任演説をする政治家の口をはぎ取ってポケットに入れたら、耳のお医者家で御飯が炊けなくなるって？どうして？

男）就任演説をする政治家たちの口をはぎ取ってポケットに入れたら、政治家たちは演説ができなくなる。政治家たちの演説が聞こえなくなったら、民衆の耳は腐らなくなる。民衆の耳が腐らなくなると、耳のお医者家で御飯が炊けなくなるんだ。（拍手・歓声）

ロ）なるほど。こいつらの口をはぎ取ってポケットに入れたら、こいつらの家で御飯が炊けない。ところで、そこのヒマラヤを引っ張って来てここに置けばだ、私んとこのダール<sup>(11)</sup>が料理れなくなるんだよ。（笑）

男）ダールが料理れなくなるって？

ロ) ああ。

男) どんなダールだい? マースのダールかい? それとも、マシャングのダールかい?

ロ) マースのでも マシャングのでもない。ハシャングとパシャングだ。(笑) 私のそこの店にだな、毎朝、客がもう来ているかなあ、と思いながら慌てて(ハシャング) 急いで(パシャング) 走ってって店を開けるんだ。<sup>(12)</sup> もし、ヒマラヤを持って来てそこに置いたら、そうやって一生懸命やってる私の店の売上げが干上がっちゃうまいかね?

男) 店の売上げが干上がっちゃうって? 何の店だい、あんたの店ってのは。香港の金ののべ棒でも売ってんですか?

ロ) どうして香港の金ののべ棒なんだ? ネパール市民権を売る店に決まっているじゃないか! (拍手・歓声)

男) そのネパール市民権を売る店から市民権を買ってくる連中の吐く息で焼けて暑くなるもんだから、ヒマラヤを持って来て置かなきゃならないんだよ、ここに! (拍手)

ロ) 言いたいことが言えるからって、何を言ってもいいと思っているのか!? その市民権を持ってやって来た連中は、来たらずくに、コロombo・プラン<sup>(13)</sup>で外国に勉強しに送り出してやろうじゃないか。(拍手・歓声)<sup>(14)</sup>ここに置いときゃしないさ、連中を。

男) そいつらはコロombo・プランですぐに外国へ留学させて、ぼくらはヘランブ・プランでそいつらの国へ戦いに行かされるのか? (笑)

ロ) 戦いに行かさなかったら、何をやる? 戦いに行かせた残りの連中は、アイン・クラブ・ジンダーバード<sup>(15)</sup>と言いながら歯向かって、闘いを挑むじゃないか、我々に。しかし、我々はおまえらに警察を見せつけてやるさ。そして、アイン・クラブ・ジンダーバードって言うんだ。そしたら、警察を見て一目散に逃げるんだ。(笑)

男) わかったぞ。警察とつるんでいるんだろう、あんた? そして、よそんな家の灯油缶を転がして持ってきたんだ、ここに。(笑) わかったぞ! 僕はあんた

が何者か、わかったぞ！もう何も言う必要はない。貴様が何者か、明かになったんだ！！

ロ) 君は私が灯油を盗んで持って来たって、罪を被せようってのかね？ちょっと舐めてみればいいさ。そうすれば、ドラム缶の中身が分かるから。

男) だとすると、食用油を盗ってきたんだろう。(笑)

ロ) また、盗ってきたって言う！飲んでみるよ。そしたら、分かるから。

男) じゃあ、ガソリン(ペトロール) だろ？

ロ) 「ペ」からじゃない。「パ」から始まるんだ、このドラム缶の中身は。

男) 「パ」から始まるもの？それじゃあ、ジャーヴァンジャル<sup>(116)</sup> だ。

ロ) ジャーヴァンジャル！「パ」から始まるって言ってんだぞ。(笑) ジャーヴァンジャルのどこが「パ」から始まるんだ？(笑)

男) ジャーヴァンジャルは、下痢(パカーラー) したときに飲むだろ？(拍手) だから、「パ」から始まる。(笑)

ロ) ちょっとは考えてものを言えよ。一体誰がジャーヴァンジャルをドラム缶に入れて持って来る？

男) 入れようと思えば、どこにだって入れれるさ。雌牛とロバを区別できないような雄牛をガイ・ジャットラ検閲評議会に座らせることだって出来るんだから。(拍手) APROSCのボスが日本に行ってるあいだに、P. M. に気に入られたH. M. がG. M. の席に自分とこの人間を座らせることだって出来るん

だ。<sup>(117)</sup> (拍手) パンチャたちは、パンチャたちが計画したパンチャ大会に反対するために、政府の公用車に自家用車のナンバー・プレートをつけることだって出来るんだ。<sup>(118)</sup> (拍手) ジャーヴァンジャルをドラム缶に入れるぐらい、朝飯前さ。(笑)

ロ) パンチャ大会に反対するために、公用車に個人のナンバー・プレートをつけたなんて、一体何の根拠があってそんなことを言うんだ？証拠を見せてみる！(笑)

男) 証拠？その車を運転していたのは、僕だよ。その僕が知らないはずはない



だろ？（拍手）

ロ）なるほど、君がその車を運転していたってわけか。だとすると、君は政府の雇われ人だな。

男）雇われ人さ。

ロ）いいか、お前は政府に雇われているんだ。雇われ人の首を切るも繋ぐも、私次第なんだぞ。だから、雇われ人は雇われ人らしく、分をわきまえてものを言いたまえ。

男）雇われ人だか何だか知らないけど、そんなもの辞めちまいましたよ。今じゃ、僕は世捨て人になって、放浪しているんだ。辞めてやったんだ、雇われ人なんか。

ロ）辞めたって？

男）ああ、辞めてやったさ。

ロ）どうして、辞めたんだ？

男）一体誰が、政府の公用車のお抱え運転手なんかになる？東の方に連れて行かれて殺された日にゃあ、どうするんだい？（拍手・歓声）<sup>(19)</sup>

ロ）お前、今、何て言った？何て言ったんだ？もういっぺん言ってみろ、おい！

男）東の方に連れてかれて殺されちまったら、どうするんだって言ったんだよ。え？どうするんだい？

ロ）お前の恋人が他の男を探して、そいつと結婚するだけさ。（笑）運転手が命令に背いたんなら仕方がないだろう。自分より地位の高い人間が、ほんの少し荷物を国境の向こうに運んでくれよって言ったときに、そのとおりにしてそいつに一体何の損があったっていうんだね？（笑）その運転手が間抜けだったってことよ。

男）いいか、あんたにひとつだけ言っておこう。運転手の前で運転手のことを間抜けだなんて金輪際言わないことだ。分かったか。さもないと、警察が僕を捕まえて、連れていく羽目になるぞ。（笑）

ロ）どうして？

男）僕があんたを殴るからだ！（笑）

ロ) あやや……。運転手の前で運転手のことを間抜けだって、運転手が言うこともいけないのか？え？(笑)

男) 何だって？あんたも運転手なのか？

ロ) じゃあ、何なんだ？

男) あなた、どこの事務所の車を運転しておられるんで？

ロ) 私は『・・・協会』の車を運転しているんだ。

男) 家族計画協会の車か？

ロ) ちがう。

男) とすると、ネパール・マラリヤ撲滅協会だな？

ロ) ちがう、ちがう。ネパール政党撲滅協会だ。(笑)

男) えっ？ネパール政党撲滅協会だって？ネパール・マラリヤ撲滅協会ってのは、ネパールからマラリヤを撲滅しようって協会だけど、ネパール政党撲滅協会ってのは、何だ？

ロ) ネパールから政党を撲滅させる協会だ。(笑)

男) えっ？そんな協会もあるんですか？

ロ) あるさ。

男) そんなオフィスがありながら、ネパールでは最近「党」が至る所にできているのか？

ロ) どこにできているんだ、党が？

男) ちょっと前までは人間が意見の違いから党を作っていたけど、今じゃあ、あなた、電話番号が4から始まる電話線が新しく出来てからと言うもの、電話まで意見の違いで「党」を作り始めたんだよ。(笑) 4から始まる電話番号は5から始まる電話線が話をしようとしても話をさせないんだ。(笑) 5から始まる電話線は、どんなにベルを鳴らしても2から始まる電話線が真ん中に割り込んで雑音を入れるんだ。(笑)<sup>(20)</sup>

ロ) そんなことは、みんな、私は知っているさ。いいか。私は承知しているんだ。けれども、どうやってそういった党を解散できると言うのかね？私は3年契約で仕事をしているんだよ。そして、その3年目が終わろうとしている

んだ。もし、あと5年契約期間を延ばせれば、私だって何とかすることができるさ。(21)

男) 5年だって? どうして契約なんかで働きたいんだい? 公務員試験に受かったんなら、永年雇用じゃないか!

ロ) そりゃあ、公務員試験を受けて就いた仕事ならそうだが、選挙を聞かんなきゃならないんだから、そうもいかないさ。(笑)

男) 運転手なんて、取るに足りない仕事をするにも選挙があるのか!? この世の中のいったいどこにそんな規則があるんだ?(笑) 聞いたこともない。どんな車なんです? どこで作った車ですか? スイス製? それともオランダ製?

ロ) スイス製でもオランダ製でもない。ネパール製の車だ。(笑)(22) ネパールで作った車を運転しているんだよ、私は。分かったか?

男) ネパールでも車を作っているのか!?

ロ) 作っているさ。何を作っているかも知らないんだな。

男) 他のものなら知ってるけど、自動車は知らないよ。

ロ) 何を知っているんだね、あんたは?

男) 内閣で汚職があったぞって新聞が書きたてたら、5万ルピーの銀行預金がなくなるってことを知っているよ。(拍手)(23)

ロ) そんなことは私だって知っている!

男) 新しい新聞法だって知ってるさ。「アルタ・ナ・バルタ・ジャルシ・ガイー・ピウンコ・ドゥスマン・ローハニー・ダーイー」(24) っていう予算を組んでいることも知っているぞ。(拍手) でも自動車を作っているとは、知らなかったなあ。どんな自動車だい? 何馬力?

ロ) 馬力じゃない。140分の25ジャッカル・パワーの車だ。(笑)

男) 140分の25ジャッカル・パワー!?

ロ) そうだ。

男) そうだとしたら、ガソリンを随分食うんだろうなあ。

ロ) ガソリンで走るんじゃないって言ってるだろう。

男) ディーゼル・カーか! そりゃあ、大変だ。

ロ) ディーゼル・カーでもないって言うてるだろう。ドラム缶の中身を見てみるよ。汗で走る車だよ、これは。(笑) この汗を集めて来たんだよ、ドラム缶を転がしながら。

男) えっ! 「パ」から始まるってというのは、汗(パシナー)のことだったのか! 汗ねえ。どんな汗で走るんだい? その汗は男か? それとも女か? (笑)

ロ) 汗にも男とか女とか、あるのか?

男) 男の身体から出た汗は男、女の身体から出た汗は女だよ。(笑)

ロ) この汗は男でも女でもないさ。

男) じゃあ、どんな汗だい? 暑いときに出る汗かい?

ロ) ちがう、ちがう。重労働をするときにポタッポタッと滴り落ちる汗だよ。(笑)

男) へえ。で、そんな汗をどこから持ってくるんだい? それとも自分で働いて汗を絞りとっているのか?

ロ) 汗を集めるのに苦労はないよ。どんなにたくさん必要としても、足りるんだ。役所を回って、そこで役人たちが部下が重労働をして流した汗をギャロン当たりいくらかで売りに持って来るんだから。(拍手)<sup>(25)</sup> そうかと思えば、社会奉仕家たちが福祉活動をして流した汗を、日和見主義者たち<sup>(26)</sup>が洗面器いっぱい一回外国へ行くために叩き売りに持って来るんだ。(拍手)だから、汗が不足することはないよ。

男) [笑いながら聞いているが、しばらくしてハツとする。] 140分の25ジャッカル・パワーの、民衆の汗ではしる、ネパール政党撲滅協会の車・・・という、政府だな! えっ!! その運転手があなたですか!?

ロ) ようやく私が誰だか判ったようだね。(笑)

男) [襟を正して] ごきげんよう! (笑)

ロ) ふむ。

男) その車ってのは、ときどき道端でえんこして、<sup>(27)</sup> そのたびに世銀とかOP ECとかUNESCOとかが後押しして、それで又走り出す車のことだろう?(拍手)

ロ)「外国から後押ししてもらって」っていうべきところをどうしてニヤニヤしながら言う必要があるのかね!? 壊されたら押さなきゃならないだろう!?(笑)

男)自分で運転する車まで、どうしてそんなふうに壊してしまうんですか?

ロ)私だけが壊した張本人だって言うのか? 私の前の運転手ももうすでにぶっ壊していたんだよ、その車を。(笑) 見に行くか? その車はなあ、クラッチもアクセルもブレーキも効かないんだ。ギアを使おうとしてもバック・ギアしか効かないんだ。(拍手) 前に進もうと思ってハンドルをきって思いっきりアクセルを踏むと、後ろへ、後ろへ、と進むんだ。(笑) もっともクラクションだけは飛び抜けてよく鳴るんだ。<sup>(28)</sup>だから、今のところ事故だけは起こしていない。

男)事故がないって!? このあいだ、ピスカル地方で人を轢き殺したのは、その車じゃなかったのか!?(拍手・歓声)

ロ)ちがうよ! 轢き殺したんじゃない! 人々が座って劇を観ているところで、思いっきりアクセルを踏んだんだよ!!(笑)

男)で、そのとき、あんた、酒でもたらふく飲んでいたのか?(笑)

ロ)私はただアクセルを思いっきり踏んだだけだ。ハンドルはカラーシーたち<sup>(29)</sup>が握っていたんだ。そいつらがハンドルを右にきったり左にきったりしていたんだ。(拍手) そのとき、女・子供が死んだからって、どうすりゃいいんだい? そんな気分になっていたんだから、カラーシーたちが。

男)〔足で地面の煙草の火を踏み消す仕種をしながら〕そんなカラーシーなら、僕だったら、喫い終わった煙草の火を消すみたいに、こうやって、そいつの首ねっこを捕まえて、地面に叩きつけて、こうやって、踏みつけにして・・・。(笑)

ロ)そんな、煙草を踏みつけにするみたいなこと、お前だけじゃない、お前の爺様にだってできやしないさ。

男)僕の爺様にはできないだろう。でも、爺様より強いのは僕だぞ。(笑) 僕の爺様は100 ルピーでお米を買って運ぶとき、自分だけでは運びきれなくて、

他にもう一人、力のある奴を連れて来て運んだもんだよ。でも、僕は、100ルピー分のお米くらい片手でかついで持って来ることができるさ。(拍手・歓声) とすると、爺様ができなかったことをその孫ができるかできないか、わかるだろう？<sup>(30)</sup>

ロ) そんな、お米を持ち上げるようなことができるからって、我々に対して何かできるとでも思っているのか？先日、私の前の運転手が、42人のカラーシーをひきつけてきたけど、我々に対して何もすることができなかったんだぞ。

男) 風の吹く方向に従って、ポケットにインド・ルピーを入れてインドへ行きながらいるカラーシーたちをそそのかして連れてったんだらうよ。(拍手・歓声) 他の連中をそそのかして連れて来ればよかったのにさ。<sup>(31)</sup>

ロ) ダラハラ塔みたいにまっすぐな私に、お前は言いたい放題言って、こっちが応える先から言い返したりして、怒らせてもいいのか!? 時計塔みたいなカラーシーたちの前に出るか!? 一言でも口を聞いたらお前の頭がガンガンって鳴り響くぞ。(笑) ガンガンだぞっ。分かっているのか？<sup>(32)</sup> 私が何か言うたびにお前は機関銃みたいに言い返す。(笑) いいか、カラーシーたちの前に行ってそんなふうには振る舞ってみろ。そんなふうには、いっぺんでも喋ってみろ。そうしたらわかるぞ、私が何も言えないことが。私だけじゃない。誰も一言も言えないんだ。わかるか？

男) こないだ、あんたのカラーシーたちが道を歩いているとき、ねずみがチュッチュッと行ってたぞ。(笑)

ロ) それはきつとねずみを踏んずけたんだよ。それで、ねずみが泣いていたんだらう。誰もカラーシーたちに話しかけることなんかできないんだ。わかるか？私だって、喋れないよ、あいつらの前では。あいつらが言うことは何でも、はい、承知しましたって聞くんだ。(笑) 時々あいつらは私に、顎に髭を生やして腰にサリーを巻いて踊って言うんだ。私は喜んで踊ってやるよ。(笑) もっと腰をくねらせろって言ったら、こんなふうにくねらせて踊ってやるんだよ、私は。キャバレー・ダンスをしろって言うこともあるんだ。したらそれも踊ってやるんだ。

男) やつらが言うからって、あんまり腰を思いっきりくねらせたりしない方がいいですよ。あんたの腰は細いんだから、思いっきりくねらせたりすると折れてしまいますよ。(笑)

ロ) 私の腰が折れるからってやつらの言うことを聞かないのか? 私だって以前はカーラーだったんだ。私を運転手にしてくれたのはカーラーたちだよ。で、私がそんなやつらの言うことを聞かないでいられるっていうのか? だから、今だって、カーラーたちが、僕らは自動車に乗って行くから、あんたはちょっとばかり、汗を集めて持ってきてよ、運転手さんよって言うから、かしてまりましたって、汗を集めてきたんだ。ところで、このヒマラヤを引っ張っている奴らの汗もちょっとばかり分けてくれよ。無駄になっているじゃないか。

男) ヒマラヤを引っ張っている奴らの汗じゃなくて、ヒマラヤの汗を入れて動かせばいいのに、その車。

ロ) ヒマラヤも汗をかくのか?

男) かくさ。どうして、かかないんだ? ネパールの発展のためにとって世界中からお金を借りるとき、ヒマラヤがその証人になるんだ。それで、借金が返さなくてガミガミ言われるもんだから、はあ、どうも、すみませんって汗をかくんだよ、ヒマラヤが。(拍手・歓声) その汗で車を走らせたらどうだい。プーンプーンって。(笑) それから、観光開発のためにとってお金を借りるときは、ソエンブーが証人になるんだ。で、観光開発はできないわ、借金返す前に死んでしまうわで、ソエンブーの額から恥ずかしさの余り、ヒタッヒタッと汗が滲み出るんだぜ。(拍手) その汗で走らせなよ、プーンプーンって。(笑) それから、よその国で、入ってきた外国人が、俺たちにも取り分をよこせて騒いでいるのを見て、ネパールにやってきた外国人も取り分を要求するんじゃないかと、冷汗をかいているんだ。<sup>(33)</sup> その汗を使って走らせなよ、その車、プーンプーンって。(笑)

ロ) いいか、私は目で合図されたって平気だ。ウィンクされたって平気だ。抱きつかれたって平気だ。けれども、自分のことを皮肉られるのだけは我慢が

できないんだ！（拍手・歓声）<sup>(34)</sup>私はこんな大きな生卵だって消化してみせるし、建設中のこんな大きな橋だって食べてやるが、皮肉られると胃がキリキリ痛むんだ。（笑）わかったか？私のカラーシーたちには黙っててやろう。〔舞台奥に向かって叫ぶ〕カラーシー！カラーシー！ヒマラヤを引っ張ってそっちに持っていけ！もっていったか？ナヴァールパラシーに！よいしょ！！おーい、テンジン！テンジンよ！こいつら、ヒマラヤを引っ張ってる奴らを遅らせろ！私も行くぞ！よいしょ！（笑）

男）今来た奴らを滑って転がせておくれよ！僕も行くぞ！待て、待て！よいしょ、どっこいしょ、力いっぱいひっぱれえー。（笑）

幕



## 訳注

訳注を作成するにあたっては、ネパール語の台本作りを手伝ってくれたネパール人協力者と作者であるマダンクリシュナ・シュレシュタおよびハリワンシュ・アーチャールヤの解説、さらに筆者が複数のネパール人の友人から耳にした「噂」を積極的に資料として用いている。

厳しい言語統制が行われ、活字になった情報とは相反する口伝えの情報や噂が氾濫していた当時のネパールの状況においては、活字化された情報が口伝えの情報や噂よりも真実であると断言できるような根拠は存在しない。ここで、上述したような口伝えの情報や出所の明らかでない噂を資料として用いたのは、現実がどうであったか、ということよりもむしろ、人々が現実をどのようなものとして認識していたか、あるいは、事実がどのようなものであると信じていたか、ということの方が、民衆相手の「お笑い」を理解するためには重要であると思われるからである。

- (1) カトマンズにある市場。
- (2) ネパール北東部の地名。
- (3) ゴミ収集のトラクター。
- (4) 映画館で上映記録を示すときに使う表現のパロディー。
- (5) パンチャ大会というのは、村落や県、郡など、それぞれのレベルでパンチャーヤト政策を宣伝するために開催される大会。パンチャたちの他、地域の住民の参加も望まれる。しかし、人々はパンチャ大会に参加しながらないため、政府は村人に12ルピーずつ配ってトラックで村々からパンチャ大会の会場まで連れてくるのだといわれていた。このようにしてできるだけ多くの人々を集め、パンチャーヤト体制が民衆に支持されていることを誇示するのがパンチャ大会の目的であったそうである。政府は、体制側の村の役員などにまとめてお金を渡すため、実際には彼らがお金をも自分のものにして脅迫して村人を動員するということも行われていたと聞いている。

- (6) 1984年11月にGrindlays Bankがカトマンズに店舗を開いて以来、外資系の銀行が次々と進出してきた。
- (7) ヒマラヤ山脈の山の名前。
- (8) ネパール語で「やすらかに」という副詞は「やすらか」という名詞と「～と一緒に」という後置詞（英語の前置詞withに相当する）が組み合わさってできる。そして、「やすらか」という意味のネパール語の名詞「アーナンダ」はネパール人の男性の一般的な名前のひとつでもある。したがって、「やすらかに過ごす」というネパール語は「アーナンダと一緒に過ごす」という意味にもなる。
- (9) 「男」を演じているハリワンシュの名前の「ハリ」はヒンドゥーの神の名前である。ヒンドゥー文化圏では、子供の名前にラームとかクリシュナといった神の名前をつけることが少なくない。
- (10) 「陸に囲まれている」「熱風に囲まれている」「氷に囲まれている」という3つの表現をネパール語で「ブー・パリヴェスティット」「タートー・タートー・ルー・パリヴェスティット」「チーソー・チーソー・ブー・パリヴェスティット」という形で表し、語呂合わせと音合わせによる「笑い」の技法を用いている。
- (11) ネパールのヒンドゥー文化圏および北インドでの一般的料理のひとつで、日本の味噌汁に相当する豆のスープ。
- (12) 「マース」も「マシャング」もダールを料理するのに使う豆の一種。「ハシャング」と「パシャング」はどちらも「急いで」「慌てて」の意。この部分は語呂合わせによることばのリズムの面白さを表現したもの。
- (13) 1950年にコロンボで開かれた英連邦外相会議で設立された国際的な協力機構。日本も援助国として加盟している。
- (14) ネパール政府はコロンボ・プランからの奨学金で、ネパール人研究者を外国に留学させているが、インド人がネパール市民権を買って奨学金を得るため、ネパール人研究者の留学のチャンスが少なくなっていることが報告されている。研究・教育施設が不十分なネパールに比べて、インドは教

育制度・研究機関が整備されており、数多くの優秀な研究者を輩出している。そのため、奨学金をめぐる競争ではネパール国内で教育を受けたネパール人より有利な立場にある。さらに、ネパール市民権を買ってネパール人として奨学金を受けたインド人研究者がインドに「留学」するケースもあるという。

- (15) 1979年の反体制運動は学生運動から始まった。「アイン・クラブ・ジンダーバード」というのはデモのときに使うことば。
- (16) ネパール語で「ジーヴァン」には「命」の意味があり、「ジャル」は「水」を表す。したがって直訳すると「命の水」。子供が下痢したときに飲ませるのが一般的。
- (17) APROSC (Agricultural Project Services Centre) のチーフはネパール・ナショナル銀行から派遣されることになっている。首相が派遣されてきたチーフを好まず、彼が日本へ出張中に自分のお気に入りの部下をチーフのポストに座らせてしまったという、政治家による権力の濫用を風刺したものだ。APROSCは農業開発プロジェクトの評価などを行う農業省の外郭団体。P. M. は首相、H. M. は当時農業大臣の地位にあったヘーム・バハドゥル・マッラ、G. M. はジュネラル・マネージャーのことで、ここでも語呂合わせをしている。
- (18) ロケンドラ・バハドゥル・チャンドはスールヤ・バハドゥル・タパが組織したパンチャ大会を妨害するために、自分の派閥のパンチャたちに公用車のナンバー・プレートを外して（誰の仕業かわからないようにするため）パンチャ大会に乗りつけさせ、妨害行為を行わせた。パンチャというのは、表面上はパンチャーヤト支持の体制派の人々だが、実際にはもと政党活動をしていたり、反体制派出身のパンチャたちも混ざっており、彼らは体制内に入ってから反体制派と深い繋がりをもっていると言われていた。パンチャたちの権力闘争は、このような人々を利用したり、このような人々に利用されたりしながら展開されていた。
- (19) 1982・3年頃、東テライ地方で当時の森林省の高官がお抱え運転手に、

密輸の手伝いのためネパール・インド間のオープン・ボーダーを越えるよう命じたが、運転手がそれを断ったため、密輸が発覚することを恐れて殺害した事件を風刺したもの。

- (20) 都市の膨張はネパールの首都カトマンズ市においても例外ではなく、隣接のパタン市を含むカトマンズ地域が近年急速に郊外へと延びてゆくなかで、新しい電話回線が次々と設置されていった。しかし、この作品が発表された当時、新しい回線と古い回線がうまく通じないという事態を惹き起こしていたという。現在では改善されている。
- (21) スールヤ・バハドゥル・タパが不信任状によって5年の任期を2年で辞め、そのあとを引き継いだため。
- (22) 「スイス製」「オランダ製」「ネパール製」の部分それぞれ英語で made in Switzerland, made in Netherland, made in Motherland と表現して、語呂合わせのおもしろさを出している。
- (23) 1981年(?)の新聞および出版法によると、個人が地方紙を新しく発刊するときは一定額の銀行預金を必要としていた。そして、政府が気に入らないような報道を行うと、これが取り上げられ、発刊が差止めになっていた。ちなみにネパールには「教育のある失業者」(educated unemployment) が社会問題になるほど数多く、彼らがそれぞれ個人で新聞の発刊を始めるなどしていたため、人口規模や識字率の低さからは考えられないほど多くの様々な新聞が存在していた。
- (24) 「マハ」が語呂合わせをして作った標語のようなもの。内容とことばのリズムのおもしろさの両方を味わうことができる。「アルタ・ナ・バルタ」は「ナンセンス、無意味」といった意味で、「ジャルシ・ガーイー」は牛の一種、「ピウン」はオフィスなどで働くもっとも地位の低い使い走りのような人々の職種を表すことばで、「ピウンコ・ドゥスマン」で「ピウンの敵」、「ローハニー」は当時の大蔵大臣でロケンドラ派の政治家プラカーシュ・チャンドラ・ローハニーのこと、「ダーイー」は「兄さん」の意で、ネパールでは年上の男の人の名前あとに付けて用いられる。全体の意味

は「大蔵大臣のローハニーは民衆の敵で、奴が組んだ予算なんか我々には意味がない」というもの。

- (25) 下級役人たちが上司に搾取されていることを風刺したもの。
- (26) 具体的には、王族や大臣たちを示していると思われる。さらに、密輸入たちは政治家や王族の保護の下に国外に出ていたと言われている。
- (27) 外国援助によって始められた開発計画が、資金不足のため突然中止されることを風刺したもの。ネパールの政府財政は1981/82年度以降急速に財政赤字を拡大させた。この年以降、開発支出だけで総収入を上回るようになり、国内の資金不足から外国援助のプロジェクト実行に支障をきたすようになった(表3・表4参照)。
- (28) 数多くの外国援助や開発計画にもかかわらず、人々の暮らし向きが良くなり、発展を遂げられないネパールの経済状態を風刺したもの。筆者が滞在していた1989年当時「我々は前進しつつある。我々はさらに進みつつある」という政府広報がテレビで流れており、インドの経済封鎖の影響で経済的打撃を被っていた民衆の間でこの政府広報が話題になっていた。「とび抜けてよく鳴るクラクション」というのは、口先では良いことばかり並べる政治家の演説や、ラジオ・テレビで繰り返し流される先ほど例に挙げたような政府広報を風刺したもの。
- (29) 運転助手。車掌。カトマンズのバスには運転手のほか、乗客から運賃を集めたり、発車の合図をしたり、バスの窓ガラスを拭いたりする男がおり、彼らの職種を表す言葉。ここではロケンドラ内閣の大臣たちを指す。
- (30) 100 ルピーで買えるお米の量の変化を通じて、近年の急速な物価高を風刺。
- (31) S.B. タパはロケンドラ内閣を倒すため42名の署名を集めたが、王室がロケンドラ内閣の退陣を望まず、不信任状の可否を問う国家パンチャーヤトの議会の日程に合わせて署名をした多数の大臣たちをインドへ出張にやったため成立しなかったと言われている。インド・ルピーはネパール人とインド人が商取引するときに使われる通貨である。また、ネパール政府はイ

インドとの貿易の決算をインド・ルピーで行っている（このことがネパール経済に影を落としている）。このため、ネパール・ルピーはインドでは紙屑同然だが、インド・ルピーはネパール人の中で重宝がられている。ここで言う「風」とは王族あるいはバーイーバルダルを指し、「風の吹く方向に従う」とは彼らの言うとおりにすることを暗喩したもの。

- (32) ダラハラ塔と時計塔で、ロケンドラと大臣たちの関係を比喩している。どちらもカトマンズにある塔。ダラハラ塔は時計塔よりも高い〔首相は大臣よりも地位が高い〕が、まっすぐで音を出さず、時計塔はガーン、ガーンという音を出す〔首相には発言力がなく、大臣たちが口喧しい〕。
- (33) インドのダージリン地方で行われていたネパール系住民の分離運動・ゴルカランド運動やスリランカのタミル分離独立運動などを指す。カトマンズの人々は一般に、インド人移民の流入によってネパールがインドに吸収され、インドの一部になってしまうという恐怖感をもっている。
- (34) この部分もナンセンスな語呂合わせで、日本語に訳しても意味が通じない。「目で合図する」と訳した部分は、ネパール語では「アンカー・マールヌ」、「ウィンクする」は「イースク・マールヌ」、「抱き締める」は「アンガーロー・マールヌ」、「皮肉る」は「シャータル・マールヌ」と表現されている。

〔表1〕マダンクリシュナ・シュレシュタとハリワンシュ・アーチャールヤの作品年表

タイトル	発表年度	形式	テーマ	登場人物
あの世	1981年8月	物語	S.B. タバと1979年	ヤマドゥット(あの世の番人)と反体制派の男
麻痺	1981年8月	物語	政治家の腐敗	政治家と医師
闘鶏	?	物語	1979年反体制運動	二人の闘鶏士
財産分配	1983年	物語	パンチャーヤト体制	弁護士と秘書と双子の兄弟の片方
ごみ籠	1983年	物語	退陣直前のS.B. タバ	S.B. タバと「男」
よいしょ・どっこいしょ	1984年8月	物語	R.B. チャンド内閣 ネパール市民権問題	R.B. チャンドと「男」
こそばすこと	?	パロディー	役人の胡麻擦りなど	視聴者からの質問を読む者と応える者
鏡	1986年8月	物語	政治家の腐敗	政治家夫妻とプスタカーリー(菓子)売り
誓約	1987年5月	物語	体制内の反体制派政治家	政治家と役人とインド人商人
歌(2曲)	1987年11月 1988年2月	歌	ゴルカランド運動、政府の 高官のスキャンダルなど	
広告局	?	パロディー	村人の政治意識の低さなど	アナウンサー二人
第34区	1988年4月	物語	政界の黒幕	カージーと掃除夫と役人およびその妻
ロンドン空港	1988年4月	物語	賄賂、民主主義	ロンドン空港の税関職員とネパール人旅行者
謎なぞ合戦	1988年8月	ショー	インドの経済封鎖	審査員兼司会者と二人の出演者
音楽	1989年12月	物語	政治家の無能	歌の教師とその妻、および生徒とその父親
ピクニック	1991年	物語	1990年4月の民主化	ピクニック用品売りの父子と会議派党员と 共産党员

〔表2〕ネパール現代政治年表（1950～85年）

1950年	王政復古
1959年	2月 憲法公布 5月 ネパール会議派政権成立
1960年	12月 マヘンドラ国王、議会を解散。B. P. コイララ逮捕
1962年	憲法制定
1968年	B. P. コイララ釈放
1972年	ビレンドラ国王即位
1975年	憲法改正による国王の権限強化
1979年	4月 反体制運動、始まる。 5月 S. B. タパ首相就任
1980年	5月 国民投票 12月 憲法改正、国家パンチャーヤトを直接選挙にする。
1981年	2月 パンチャーヤト政策調査委員会発足 5月 第一回国家パンチャーヤト選挙 6月 S. B. タパ内閣発足
1883年	7月 S. B. タパ内閣退陣 R. B. チャンド内閣発足
1984年	1月 ピスカル事件
1985年	6月 爆弾事件



(1,000万ルピー)

表3 政府財政

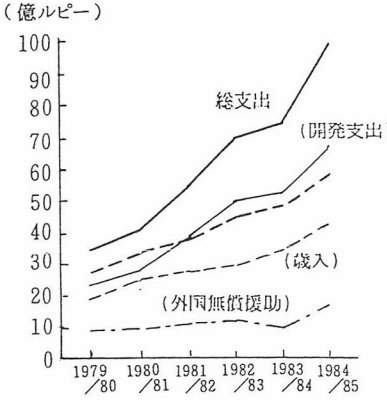
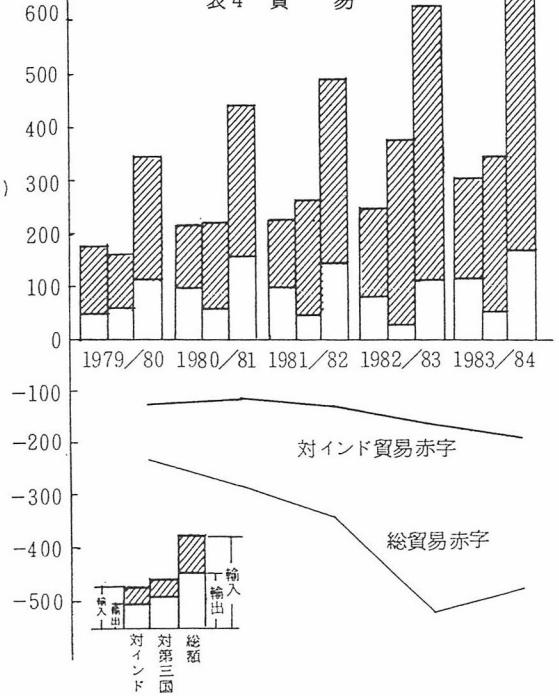
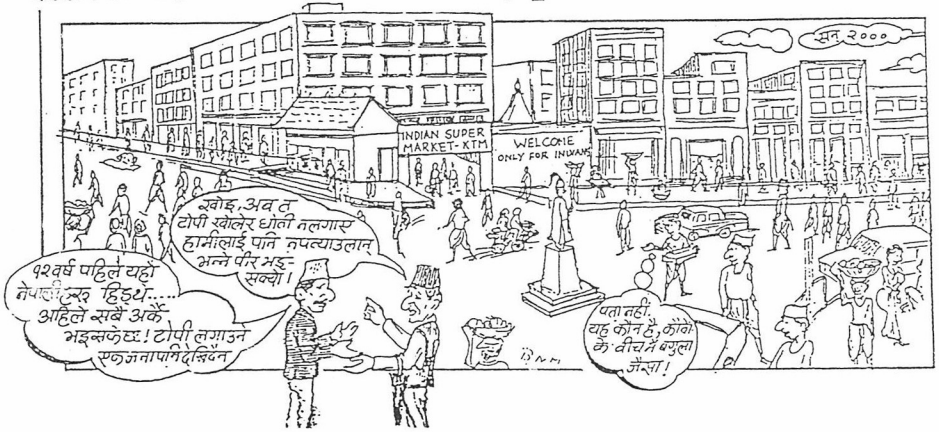


表3、表4は石井溥編『もっと知りたいネパール』(弘文堂、昭和61年)81ページ、85ページより引用。

表4 貿易



(漫画その1)



『カーマナー』1988年ガイ・ジャットラ特別号より。

# नागरिकता रमिता !

नेपालीले जति परिवार नियोजन गर्दै जाँदैन उति नेपातको जनसंख्या बढदै जाँदछ। टोकी बोरेर आउनेले टोकी बोरेर जान पाउने र तोटापालबाट टोपटालाइन पाउने सुविधालाई नागरिकताको प्रमाणपत्र थियारणले, टेवा र देवा सु-पाउने हटा प्रत्येक वकि वर्गमा कार्यक्रम चलाउने प्रस्ताव देवा हटेर ।



# नागरिकता रमिता !

नेपालीले जति परिवार नियोजन गर्दै जाँदैन उति नेपालको जनसंख्या बढदै जाँदैन। टोकी-बोकेर आउनेले धोकी बोकेर जान पाउने र लोटाबाटबाट टोपटायल हुन पाउने सुविधालाई नागरिकताको प्रमाणपत्र पिलरगले, टेस र देवा पु-पाउने हटा प्रवेक पबि वर्चना कार्यक्रम चलाउने प्रस्ताम वेग हुदैब ।



## 漫画の解説

〔その1〕右上に西暦2000年と記されている。西暦2000年のカトマンズの大通りの風景である。左下の男二人は、帽子と服装からネパール人であることが分かる。二人はネパール語で会話をしている。「12年前はこの辺りはネパール人が歩いていたものだよ。今じゃ、すっかり変わってしまったよ！帽子（ネパール帽－筆者注）を被っているのは一人も見られない。」「まったく。ドーティー（インド人が腰に巻く布－筆者注）をはかずに帽子を被ってたなんて、わしらにだって信じられなくなるんじゃないかって心配になっちゃった。」左の方に、道の真ん中に立っているネパール人の銅像を見ながら、ヒンディー語で呟いている男がいる。「誰だい？知らねえなあ。道の真ん中に鳥みたいにさ！」

〔その2〕タイトルは『市民権戯画』。その横にネパール語で「ネパール人が家族計画を実行すればするほどネパールの人口は増えていく」と書かれている。登場人物の服装とことばからインド人かネパール人かが分かるようになっている。たとえば、左上のコマでは、ネパール人の役人にトランクの札束を見せている男がヒンディー語で「ネパールに工場を開こうと思うんだ。で、市民権が要るんだよ！」と言っている。右下のコマでは、ドーティーを腰に巻いて帰宅した男が出迎えた妻に言う。「怒ることないよ。新しい市民権が手に入ったんだ。2～3日で言葉も話せるようになるさ。」